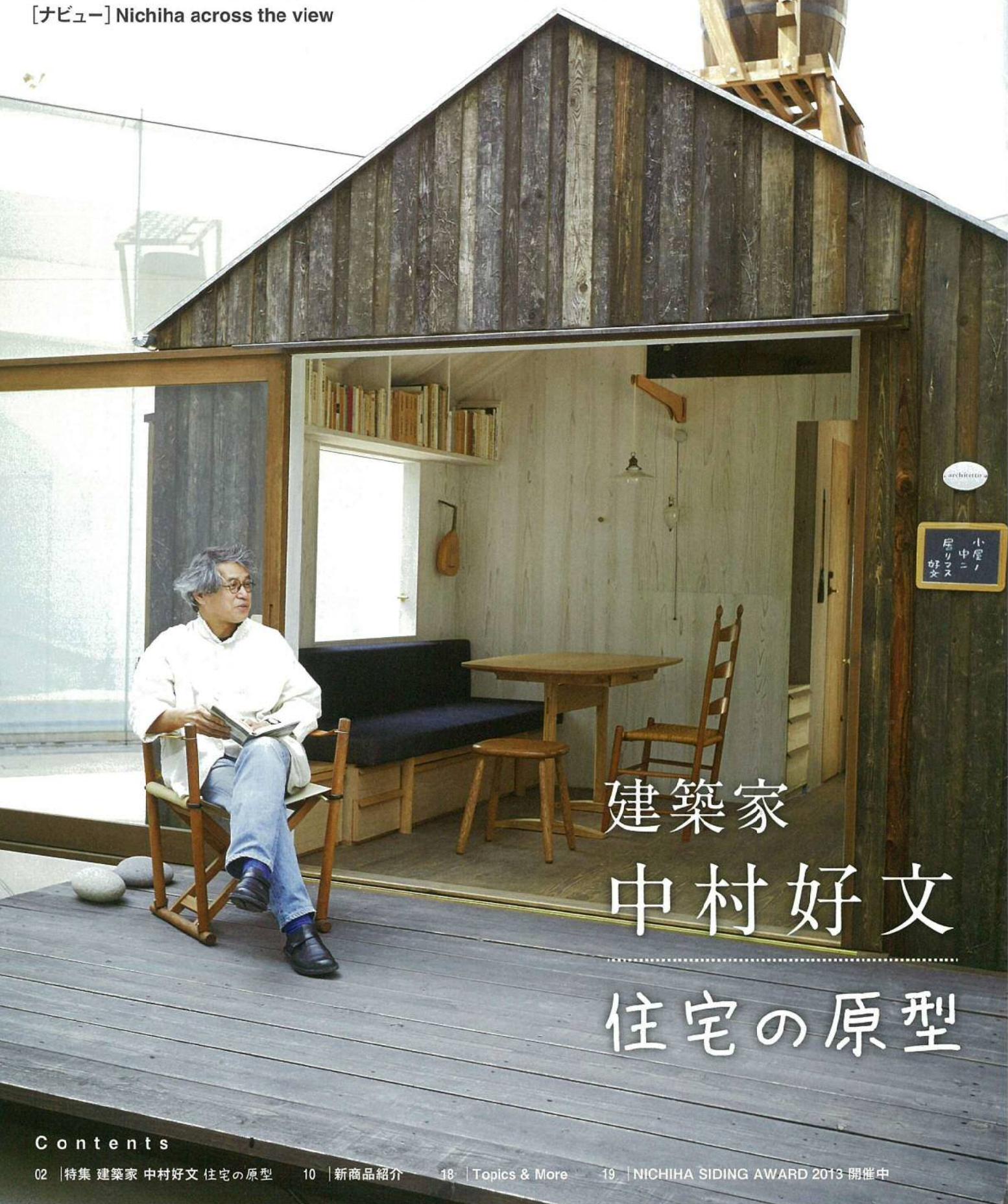


視点の先の未来を見つめて

n-a-view

[ナビュー] Nichiha across the view

2014
SUMMER
Vol.454



Contents

建築家 中村好文 住宅の原型

金沢の

「小屋においてよ!」の
世界をのぞいて

雨風をしのぎ寝起きするところ、家族が生活をともにするところ、帰ってはっとするところ、一番くつろげる自分だけの居場所…家にはさまざまな役割があります。

今回は、そんな家や住み方の原点を辿るべく、人の暮らしに寄り添った普段着のように居心地の良い住まいづくりと、その気負わない飘々とした人柄でファンの多い建築家の中村好文氏にお話を伺いに、石川県金沢市の金沢21世紀美術館内の「小屋」を訪ねました。

「小屋においてよ!」の展覧会は、中村氏が「住宅の原型」として位置づけた「小屋」に関する考察と展示を通じて「住宅とはなにか?」を問い合わせ企画として、ちょうど一年前、東京・乃木坂「TOTOギャラリー・間」で開催されました。建築関係者だけでなく、多くの一般来場者で賑わい、盛況を見せた画期的な展覧会でもあります。その最初にして最後の巡回展が、この度、金沢21世紀美術館で開催されています。

2会場のうちのメイン展示が、中庭的スペース「光庭」に建築された原寸サイズの小屋「Hanem Hut(ハネム ハット)」。エネルギーの自給自足を目指すひとり暮らし用の小屋は、居間、食堂、寝室を兼ねる部屋に、キッチンとトイレ、シャワー室が備え付けられているワンルームタイプで、ソーラーパネルと風力で電気を貯め、雨水をトイレやシャワーなどの生活用水に利用する仕組みとなっています。

一方、「長期インスタレーションルーム」には、中村氏が長年思いを寄せてきた古今東西の7つの名作小屋の紹介に加え、「Hanem Hut」のスケッチや設計図面一式の展示、小屋の工事を記録したメイキング映像コーナーも設けられています。

初日には、中村好文氏による講演会「小屋への道のり」が行われ、大きな家を建てることが甲斐性といわれる北陸においても、会場は満席となりました。



長期インスタレーションルームの展示風景

講演会で語られた 小屋への 道のり

その1

幼児期からの 道のり

「少年は樹上に家を持ち、少女は人形の家を持つ」。中村好文氏が「家」を想うとき、真っ先に頭に浮かぶ言葉なのだという。子ども時代、ツリーハウスはなかったものの、家のかわりにある樹に登り下りし、旺盛に巣づくりにいそしんでいたという中村少年。中でも一番古い記憶は、ミシンの蓋の下の「巣」(下)

図)なのだそうだ。

新聞紙をし型に蓋にかけ、下にもぐり込んで膝を抱えて座っていたそこは、居心地のいいとておきの隠れ家となつた。当時そこで聞いていたラジオドラマ「紅孔雀」の記憶から放送時期を調べたところ、当時6歳の経験だったと振り返る。読書をしたり、ラジオを楽しんだその小さな空間が、中村氏のいう「小屋の処女作」なのだ。

そして数十年後、「中年も樹上に家を持つ」として、2坪に満たない「木の上の家」を建てた。別荘として読書をしたり昼寝をしたり、中村氏の巣づくりは、少年時代と変わらず続いている。変わったのは、読書のとき片手にしたジャースがビールになつたことだとか。ちなみに、中村氏の事務所 レミングハウス

の「レミング」は、北欧に住んでいた旅ネズミの名前。1948年のネズミ年生まれというのが所以である。小動物は巣づくりで巣穴を全部なめまわす習性があるといい、隅々まで心地良さを追求し、クライアントの暮らしに寄り添つた普段着のように居心地のいい住宅を設計されてきた中村氏の住宅のつくり方も、これに通じる。

イラスト:中村好文

その2 古今東西の 小屋をたどる道のり

これまで中村氏が訪ね歩いてきた世界各地にある古今東西の名作小屋の中から、展覧会で紹介された小屋は以下の7つ。中村氏はこれらの小屋に向かい合って、「人の住まいと暮らしの原風景を目当たりにする想いにとらわれる」という。

◆鶴長明の方丈

日本の歌人、随筆家。(1155~1216)
晩年、京の郊外に丈四方(方丈)の狭い庵を結び隠棲した。庵内から当時の世間を觀察し、書き記した記録が「方丈記」。

◆ル・コルビュジエの休暇小屋

フランスで活躍した建築家(1887~1965)
エラン・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローとともに近代建築の三大巨匠とよばれる。南仮に建てた休暇小屋は、最小限寸法の実験住

◆高村光太郎の小屋

彫刻家詩人(1883~1956)
自分が丸太小屋を建て2年2ヶ月自給自足生活を送った。

◆ブル・ゴルビュジエの休暇小屋

日本スキー界の草分け的存在。(1890~1986)
生涯にいくつも小屋を手づくりした。中村氏曰く「小屋の師匠」。

◆堀江謙一のマーメイド号

海洋冒險家。(1938~)

◆立原道造のヒアシンスハウス

詩人。(1914~1939)

◆猪谷六合雄の小屋

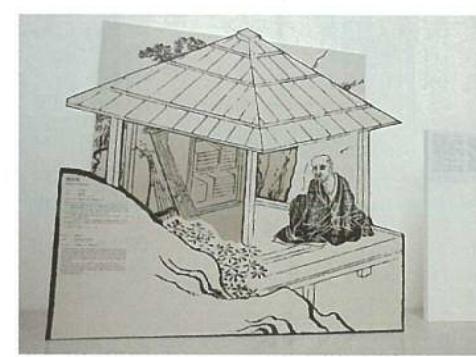
建築家としての将来も嘱望されたが、弱冠24歳で急逝。ヒアシンスハウスは、立原自身の小屋の計画案。



杉板張りの小屋型枠に、名作小屋の模型や写真、映像が展示されている。



小屋の達人たちの写真。



観光地にある顔出しパネルのように、鶴長明の顔の部分が開くしきになっている。こうした遊び心が、気付いた来場者をにやりとさせる。



光庭に建てたメイン展示
「Hanem Hut」。

Lemm Hutへの道のり

中村好文氏は2005年から長野県浅間山麓で、レミングハウスのスタッフとともに手づくりした14坪のLemm Hutで週末の小屋暮らしを愉しんでいるといふ。文明の命綱(ライフライン)とも言うべき、電線、電話線、上下の水道管、ガス管に繋がっていないエネルギー自給自足を目指す実験住宅である。

電力はソーラーパネルと風車の発電で貯う。片流れの大屋根で集めた雨水を地下の受水層に溜め、手こぎのポンプでリサイクル品のウイスキー樽に揚げ水圧を利用して台所とトイレと洗面と浴室に給水する。調理

はすべて炭火を入れた七厘で行う。書斎と寝室と脱衣所を兼用する風呂小屋は、薪で焚く五右衛門風呂。中村氏はこうした小屋暮らしで「眠っていた生活者の能力」に気づいたともいふ。

「小屋で暮らしていると、食事の支度をするにしろ、大工仕事をするにしろ、いつの間にか、五感をフル稼働させ、頭よりは手と身体を使っていることに気づきます。暮らしからで創意工夫する習慣が身に付いてくると、眠っていた生活者としての能力が呼び覚まされ、生活の知恵がじわりじわりとわき出していくのを感じます。安易に手に入る便利さや快適さが、人間本来の能力を退化させてしまうことに気づき、危機感を感じはじめたのは、小屋暮らしをはじめてからです。」(中村好文 小屋から家へ TOTO 出版より抜粋)



Interview NAKAMURA Yoshifumi



「始末に暮らすこと」の大切さを
本当は皆、心の奥では分かっているはず。
だから、小屋を見たら
「これで良かつたんだ」と思
うんです。

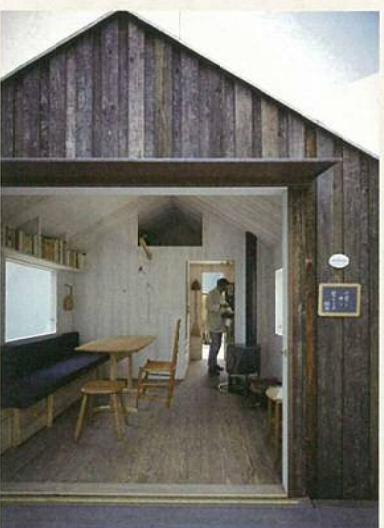


金沢21世紀美術館
「中村好文 小屋においてよ!」は2014年8月31日(日)まで開催中。
撮影:波邊修 提供:金沢21世紀美術館

――「小屋においてよ!」の巡回展先として金沢21世紀美術館を選ばれた理由についてお聞かせください。

TOTOギャラリー・間の展覧会のときに、巡回展的なものをしないか、という話をいただいていて、僕も、もう一回ぐらいいなうと考えていました。それでも本当にやるのであれば金沢で、と思っていました。僕は旅先でよく美術館に行くけれど、金沢21世紀美術館は世界の美術館の中でもう本の指に入るぐらい好き。

特に、建物があつけらかんとしてるところがいいですね。正面玄関側の道路を通ると、芝生では子ども達が寝そべっていたり、散歩する人がいたり、皆が思い思にまるで公園のような過ごし方をしているところがいいですね。周辺には兼六園もありいい場所ですね。最初はこの芝生のところにHaneem Hut(ハネムハット)を建てようと思つていま



「小屋を住まいの原型」と考える中村氏。「小屋を考えることは、暮らしを考えることでもある。小屋を通じて、普通の人が暮らす普通の人の暮らしと住まいについて考えるきっかけになれば」との思いからスタートした展覧会「小屋においてよ!」。

展覧会のメインとなる実物の小屋「Hanem Hut」は本物に徹した建築物である。大阪の羽根建築工房との協働によるもので、それぞれの頭文字Haneemと

Lemmより名付けられた。間口3.3メートル×奥行き4.5メートルの小屋の構造は、杉の三層積層パネル。模型を組み建てる要領で行われ、完成させるまでの時間はたったの72時間。

小屋用にデザインされたソファベッド、テーブル、キッチン家具が空間にすとんと納められ、試作を重ねたこというクッキングストーブが小屋に温もりを与えている。調理器具や食器、衣類、書棚にぴったり納まつた100冊の本などの小物はすべて中村氏が普段使正在るもの。

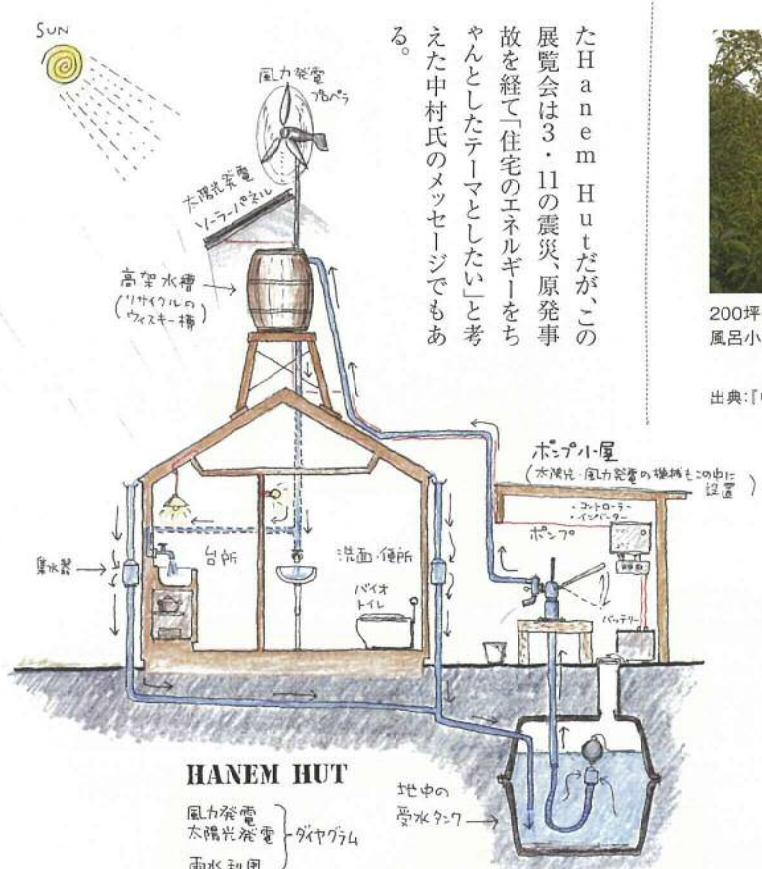
幼い頃に体験したヒューマンスケール(居心地の良い空間)が原点となり、世界各地の有名・無名の小屋を訪ね歩き、自身の小屋Lemm Hutの自給自足生活から到つ

その4 「小屋においてよ!」 展覧会への道のり

Lemmより名付けられた。間口3.3メートル×奥行き4.5メートルの小屋の構造は、杉の三層積層パネル。模型を組み建てる要領で行われ、完成させるまでの時間はたったの72時間。

小屋用にデザインされたソファベッド、テーブル、キッチン家具が空間にすとんと納められ、試作を重ねたこというクッキングストーブが小屋に温もりを与えている。調理器具や食器、衣類、書棚にぴたり納まつた100冊の本などの小物はすべて中村氏が普段使正在るもの。

たHanem Hutだが、この展覧会は3・11の震災、原発事故を経て「住宅のエネルギー」をちゃんととしたテーマとしたい」と考えた中村氏のメッセージでもある。



「Hanem Hut」の雨水利用・発電(太陽光・風力)システム。
イラスト:中村好文

200坪の敷地の奥に建てた風呂小屋。

出典:「中村好文 小屋から家へ」TOTO出版(TOTO株式会社) 2013年



展示室内のミニシアターで「Hanem Hut」のメイキング映像をみることができる。



「Lemm Hut」。小屋は目の前に広大な盆地が広がる高台にある。前方に八ヶ岳連峰、左側に南アルプスという素晴らしい眺望も楽しめる。

した。円形ガラスの建物と家型をした小さな小屋。その対比を見せるようにできたら面白いと考えていましたが、セキュリティの問題で外は難しいということになった。結果的には中庭の「光庭」に展示して良かったと思っています。

——「小屋」をつくったのは「TOPギヤラリー」間が最初だらうのでしょうか?

中村先生といえば「小屋」という代名詞になります。ですが。

「小屋なら好文」と言われても困るけど、これまでも小屋的な建物はいはいくつてきました。阪神平野と大阪湾を見下ろす六甲の山上に、眺望を愛るために建てた2坪のLuna Hut(ルナハット)や、北海道真狩村の神さんのパン工房の敷地に、薪窯小屋を改修した4・5坪の書斎とライブラリー、ゲストルームを兼ねたJin Hut(ジンハット)とか。

——展覧会の「小屋」に込めたメッセージについてお聞かせください。

エネルギーのことは、ひとりひとりが自分の生活を振り返って考えた方がいいのではと思います。たとえば電気容量でも、電化製品が増えてくるとアンペアを20、30、50と、どんどん上げていくわけでしょう。そうしないと朝、電子レンジとドライヤーを同時に使うとブレイカーガが落ちちゃう。でも考えたら、同時に使わなければ問題ないわけで、5分や10分、時間を使はずらせば済む。つまり、そういう工夫が大事じやないかと。

Hanem Hutのシャワーバッグもたいした水量は入らない。限られた量の水でシャワーを浴びようと思うと、結構、どこからどうでもなく捨てる消費と浪費の時代。「便利」と「豊かさ」が同義語となり、そのことを誰も疑たりしない時代。そんな浮き足立った時代に、この背筋のまゝぐ通った老人の落ち着きのある静かな暮らしぶり、室内の清楚なしつらえの描写を読むと、冷たい湧き水で顔を洗つたような清々しい気分になります。」
（住宅読本新潮社より抜粋）

——中村先生は家づくりにおいて、どんな点に気を配られるのですか？

僕は、自分が住みたくなるような家をつくります。敷地や法的な条件や経済的な条件、そしていろんな家族のカタチがあるなかで、自分がこの家族だったらこう住みたいという気持ちで設計したいから、依頼があると、その人と向き合い、要望書の行間を読む努力をします。たとえば僕がつくる家は全て手作りの材質もカタチも違います。階段の手すりを介してその家族のひとりひとりと握手している感じです。それこそ家中をなめ回すようにして作るんです。その人たちが暮らす家としてどうか。人に見せるための「見せたい（三世帯）住宅」や人を呼ぶための「寄せたい（四世帯）住宅」じゃなくてね（笑）。

それと遊び心も大切。機能的ななかに、ふと心が和むような工夫をしたいなと思いますね。気づいた人だけが思わず微笑むような仕掛けなんかも、わくわくするでしょ

う。※2

※2「住宅は、もちろん合理的で機能的な方がよいのですが、だからといってそれが一切無駄のない、謹厳実直、实用一点張りのただの箱だら何だかつまらないじやありませんか。家の一部にアクセントのように



太陽の熱で50°C近くまで温まるシャワーバッグを使用するシャワールーム。

それからもう一つ、質素である、簡素であることがあまり高く評価されない世の中の風潮にも不満があります。

「始末（浪費）しないように気をつけること。また、そのまま、儉約。」という言葉は最近ではあまり使われないけれど、「始末を心がける」「始末に暮らす」ということは、すごく大事だと思ふんですね。無駄づかいしないというのは美德ですから。だから、小屋を見たらこれでもいいなって思うんですね。

逆説的だけれど、たくさん持つことよりも持つことの方が豊かといつか。

僕は、住宅読本（著／中村好文／新潮社）の中でも紹介しましたが、※1 山本周五郎の「季節のない街」という小説の節に出てくる「たんさん」の6帖間の暮らしぶりがとても好き、というより理想です。

※1 「ここに描かれているのは、隣近所や世の中の風潮に惑わされずに、自分の身の丈に合った暮らしを、自身の着実なペースで営む「人暮らしの老人の生活と住まいの様子です。（中略）“すまい”と“くらし”が表裏

——エネルギー問題に加えHanem Hutでの生活は質素であります。豊かさをもたらしているようを感じます。

「豊かさ」ということについていえば、日本の場合、とくにそうだとと思うけれど、外車を持ついるとか、テレビの画面が大きいとか、そういう物質的な意味での豊かさに寄りかかりがちですね。精神的なことがないがしろにされているような感じがする。モノこそすべてみたいなモノで豊かさを量るようなところがあるでしょう。そういうのがイヤだとずつと思っていました。「心が豊かどうか」ということが本当は大事なのですね。

設けられた愉快な工夫や、ちょうどした仕掛けなどの「遊び心」は、会話のほしさのユーモアのようなもので日々の暮らしに潤いを与え、そこに暮らす人の愉悦しませ、またその気持ちを和ませてくれるからです。」
（住宅読本新潮社より抜粋）

——中村先生は、焼杉板やガルバリウム鋼板の波板、塗装の仕上げを施さない板などを採用されています。外壁材についての考え方をお聞かせください。

Hanem Hutの外壁はね、もともと吉村順三先生が建てた山荘を僕が改修することになって、そのときに出了た廃材なんでもつたないから捨てずに保管しておいたんですね。いわば50年もののカラマツ材です。だいぶん傷んでいたから剥がして、普通は捨てちゃうようなものだけれど、風合いがよくてです。ギャラリー・間から展覧会の話を聞いただいたときに、それを使って小屋を作ろうといふことになったわけです。

素材そのものの良さがあつて、それが工夫されて施工され、さらに風雨と時間で仕上げられる。この地域でいうなら、能登ヒバを取り換えるできるよう南京下見に張る。海岸沿いの家なんて銀鼠色というか、いいグレイになつて、ほんとうに惚れ惚れしますね。

——日本の昔の建物というのは、そういうことがきちんと考えられているのですね。

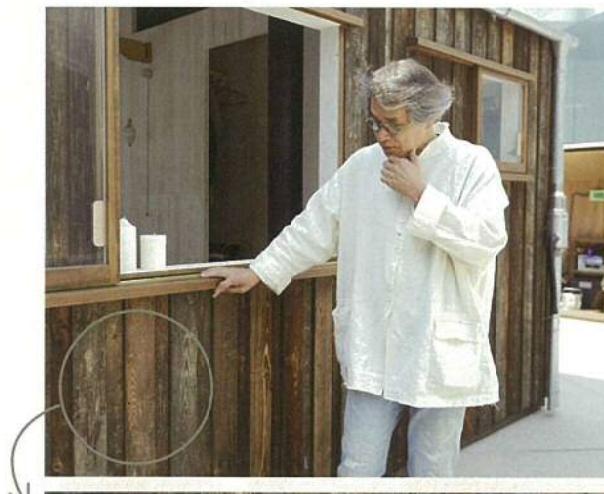
それこそ限られた資源でやろうとしていますからね。

中村氏は、小屋を前面に押し出して「エコを推進しています」と声高に主張したいわけではないという。「たとえばよくあるのがソーラー発電だけれど、あれを設置しよう

出典：「住宅読本 中村好文」 株式会社新潮社 2004年

中村好文 NAKAMURA Yoshitumi

1948年千葉県生まれ。72年武蔵美術大学建築学科卒業。1981年レミングハウス設立。1999年～日本大学生産工学部建築工学科教授。1987年「三谷さんの家」で第1回吉岡賞受賞、1993年「一連の住宅作品」で第18回吉田五十賞「特別賞」受賞。主な作品に、「三谷さんの家」「上総の家」、「museum as it is」、「伊丹十三記念館」など。著書に、「住宅巡礼」、「住宅読本」、「意中の建築上・下巻」、「パン屋の手紙」、「暮らしを旅する」など。



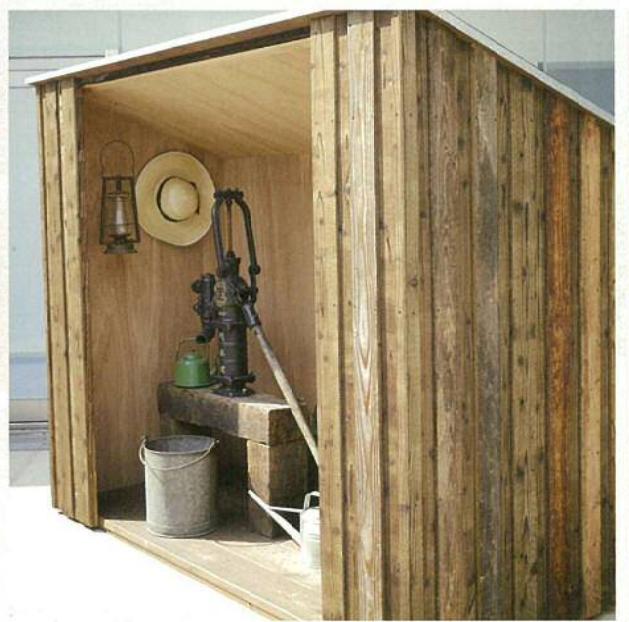
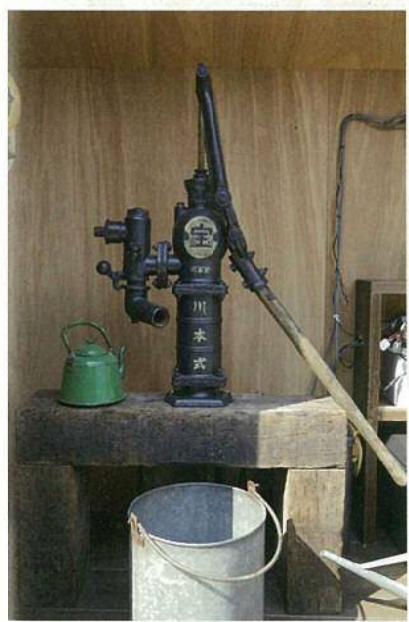
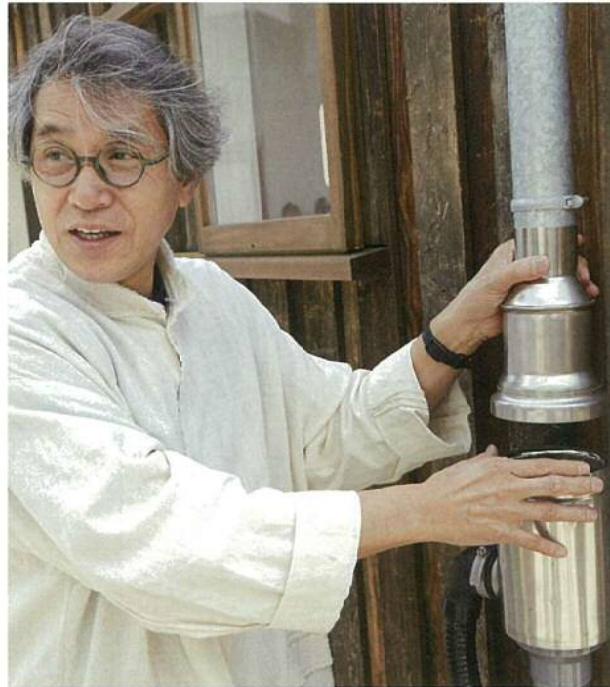
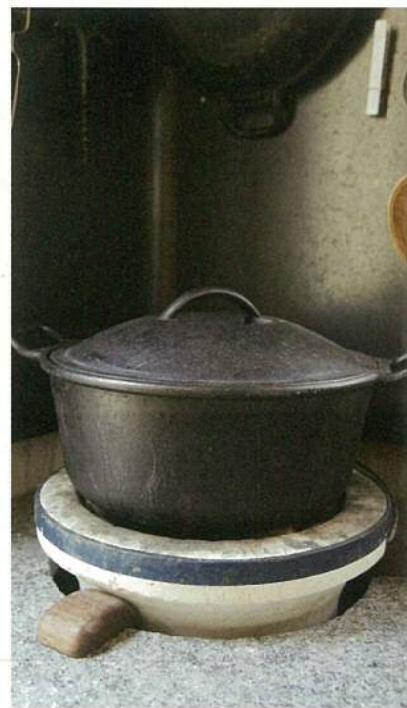
ツタがからまっていた跡も残るカラマツの古材。年月を重ねた風合いが小屋の魅力にもなっている。



「最初から完成されていなくてもいい。20年かけて家を育てていくのもいいと思いますよね。」と中村氏。



Hanem Hutの模型。



09	10
11	13
12	14

- 09 必要最小限の器や道具、調味料がしまえて、使いやすいように考えられたキッチン。
10 外で火を起こし、石のカウンターに落とし込む七輪のレンジ。下の扉を開いて火加減を調節する。
11 入れるモノによって、抽斗の深さも調整されている。
12 お皿は一番下の抽斗に立てて収納している。
13 電気冷蔵庫ではなく、氷で冷やす木製の冷蔵庫。
14 ドイツ製の集水器。たて樋の水は内側を通って流れてきて、その水がステンレスメッシュのフィルターを斜めに通りすぎると、ゴミや虫や泥が落ちてしまい、汚れた水は流れの仕組み。



「中村好文 小屋においてよ!」

2014年8月31日(日)まで開催中
開場時間／10:00→18:00(金・土曜日は20:00まで)
休場日／毎週月曜日(7月21日、8月11日は開場)、7月22日(火)
会場／長期インсталレーションルーム、光庭
入場無料

金沢21世紀美術館
〒920-8509 石川県金沢市広坂1丁目2番1号
TEL.076-220-2800 <http://www.kanazawa21.jp>



01	02
03	04
05	06
07	08

- 01 ダイニング、リビング、仕事場、寝室を兼ね備えたメインルーム。テーブル、ソファ、照明は展示のためにつくられたオリジナル。
寝る時は、ソファの下の抽斗からシーツや布団を取り出し、脚を引き出してマットレスをパタンと平らにしてベッドメイクする。
02 グリーンリーのコンポストトイレ。水で流さず、電気も使用しない。
03 中村好文氏が選び抜いたという100冊の蔵書。
04 文字盤のない鳩時計。中村氏曰く「鳩が時を告げて、もどる瞬間がいい」のだそう。
05 衣類を収納するクローゼットは、冷蔵庫の向かいに設けられている。
06-07 ポンプ小屋。雨水が地下のタンクに溜まり、高架水槽へポンプで汲み上げるという想定。太陽光、風力発電の機械もこの小屋に収納されている。
08 煙突ができるクッキングストーブもこの小屋のためにデザインされた。